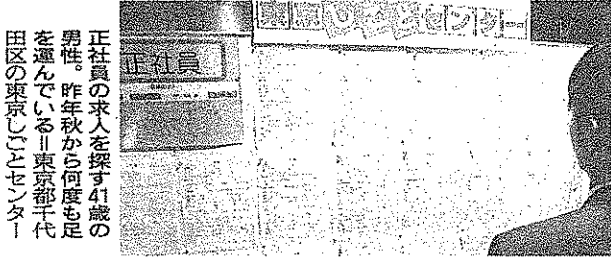


# やむなく非正規ミドル苦境

2/4 朝日

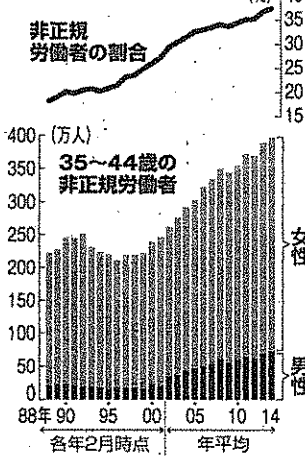
## 35~44歳男性「正社員職ないから」4割超



正社員の求人を探す41歳の男性。昨年から何度も足を運んでいる。東京千代田区の東京ジョブセンター

契約や派遣社員など非正規の職から抜け出せない40歳前後の「非正規ミドル」が増えている。特に男性は「正社員の仕事がないため」が4割超と、「やむなく非正規」を続ける人の割合が他の世代や女性の同世代を上回る。低所得で老後への備えも十分積めないまま年を重ね、政府が1月末に打ち出した非正規支援策からも置き去りのままだ。

非正規ミドルが増え続けている  
総務省「労働力調査」から



昨年末、東京都内で開かれた就職面接会の会場。千葉県に住む41歳の男性が硬い表情でブースを回っていた。9月に派遣の仕事で辞め、正社員の職をつかもうと必死だ。だが、いまだ願いはかなっていない。1998年に九州の大学を卒業して18年。気づいた

## 「ずるずると…」未来描けぬ41歳

を卒業して18年。気づいた40歳を過ぎていた。独身。結婚して子供を育てるという。若いころに思い描いた自身の姿は遠い。「ずるずると派遣社員で来てしまった」と肩を落とす。就職活動に取り組んだ90年代後半はバブル経済崩壊後の「水河期」の真っただ中。地元の百貨店などを目指したがかなわず、地元の中小商社に入った。だが営業の仕事が合わず、転職するため3年で辞めた。パソコン関連の資格を取り、派遣で働きながら就活を始

め、やっと東京のIT会社で正社員に。商社を辞めてから7年経っていた。ただ、喜びもつかの間。2008年秋のリーマン・ショックのおおりで、1カ月後に上司から突然、「来なくていい」。解雇になった。再び派遣社員としてジョブセンターや携帯会社などの職を転々としながら、食いつないで来た。派遣社員の待遇を改善させる活動をしている渡辺照子さん(56)は、自身も都内の

国の労働力調査(15年7~9月)によると、非正規で働く理由を「正社員の仕事がないから」と答えた35~44歳の男性は、45.2%。45~54歳も46.9%にのぼる。ほかの世代も含めた男性の平均は3割弱、パートの女性なども含む全体でも2割弱で、「やむなく非正規」の男性ミドル層の高さが際立つ。世帯の主な稼ぎ手としての役割を期待されることも多く、プレッシャーとなっているようだ。企業などに雇われている35

## 就職氷河期世代 乏しい政府支援

44歳は約1330万人いるが、今やこのうち約890万人(3割)が非正規だ。非正規全体の2割を占め、05年の約300万人より3割も多い。うち男性は73万人で5割以上増えた。35~44歳の層は1990年代後半からの就職氷河期や雇用環境の激変に直面した世代だ。企業は人員削減にやっきになり、政府は派遣労働の拡大など労働法制の緩和を進めた。正社員に就けず、あるいはリストアップで正社員の職を失うなどして、非正規を

のコンサルタント会社で約15年間派遣社員として働いている。渡辺さんの不安は、埼玉県内で1人で暮らし長男(36)の将来だ。長男は資材会社の派遣社員だが、「ずっと負のスパイラルで、息子が派遣の仕事から抜け出せないのが悔しい」。長男は都内の私大に入ったが、学費を稼ぐためにアルバイトをしすぎて授業に追いつけなくなり、中退。そのまま非正規の仕事についた。渡辺さんは後悔の気

持ちを隠せない。「新卒一括採用の日本では大学を中退させてしまったのがすべからず、人生、チャンスは1回切りしかないんですよ」。政策の転換必要 金沢大の伍賀一 道名 教授(社会政策) 40歳前後の非正規労働者は、バブル崩壊後の就職氷河期に苦しみ、そのまま抜け出せない世代。「自己責任」ではなく、社会全体の問題として考えるべきだ。所得も低く、未婚率も高く、孤独で貧しい老後を送る人が増えかねない。これ以上増やさないためには政策を大きく転換する必要がある。例えば、いまの職業訓練は仕事を休まなければ受けられず、ギリギリの生活を送る非正規には使いつらぬ。訓練期間中は雇用保険などで生活を支えることも必要だ。企業が正社員採用で、一定数を非正規から採る枠を設けることも考えられる。